

当院は、医療療養病棟・回復期リハビリ病棟・介護療養病棟を擁し（計119床）、外来も含めて対象者には「高齢者」が多いという特徴をもっている。そうしたなかで、看護師は病棟でも外来でもルーチン業務に追われ、地域・在宅での生活にフォーカスを当てた看護師教育にまでは行き届いていないのが現状だった。在宅生活を支える医療・看護が求められる今、院内の看護師が在宅を知り、地域と関わっていきける方法を見出せるような教育の推進に向けた、成果が出る取り組みが喫緊の要事であると考えられた。

ピンチをチャンスに変える発想から

こうした状況をチャンスに変えるべく、まずは当院の強みを知り、弱みを補完しようと考えた。そこで、まず「SWOT分析」（強み・弱み・機会・脅威という4つの要因分析により戦略策定を図る方法）を行なった。

当院は訪問看護室を擁し、訪問看護管理者1名・訪問看護師3名の看護師らが、16名の利用者に週2〜3回の訪問を行っている。この利用者には当院からの退院患者が多く、病院と在宅の連携を可能にする地域に根ざした病院であることは当院の強みだ。そこで取り組んだのが、病棟および外来看護師の訪問看護業務への同行実習である。実際に10名（全看護師の約4分の1。病棟から9名、外来から1名）の院内看護師がそれぞれ4〜6回の同行訪問を行ない、一定の成果が得られたので以下に報告する。

訪問看護同行実習の成果

事後アンケートの結果、同行訪問を行った病棟・外来看護師全員が「訪問看護の役割や利用者・家族の生活について、実習前に比べて理解できた」「病棟・外来看護師として、応用できるものがある」と答えた。①入院中に、在宅への思いを患者さんから聴取しておく必要を改めて理解した。②内服管理など、薬を飲めるように誰が何を準備するのかなどを

病棟・外来看護師の訪問看護同行に取り組んで

医療法人社団翠鳳会
翠鳳第一病院看護部長、認定看護管理者
佐藤徳子

きちんと捉えたうえで、退院指導をする必要性がある。③入院中に患者さん・ご家族の生活パターンなど聞きながら、他職種・他部門と連携をとりたい。④在宅では、病院と同じことはできない。しかし、生活の場を実際に見ることで、病院だけでなく看護を展開できる。そのなかで、支える家族をパートナーとして連帯感を持ち、達成感を共有することが大切であると理解した、などがあげられた。訪問先の利用者さんの入院中の姿を思い

出し、在宅で元気に過ごされている様子を見て感動していたことも付記しておきたい。

訪問看護側にもメリットが

一方、病棟・外来看護師に同行した訪問看護師からも、前向きな反応が得られた。①医療処置などを行なう際に病院と同じやり方は通じず、在宅ならではの手法や、身近にあるビンール袋などを効率的に使用していることに同行看護師が関心をもっていた。②利用者さん・ご家族が行なえる薬の管理方法などを考える必要があることを実際に見るなかで、病棟での応用可能性について同行看護師が話し、自分たちのアイデアも含め理解が得られた。③勤務場所の異なる看護師が同行することで、顔見知りとなり情報交換が行ないやすくなった。④訪問看護利用者についての入院時からのタイムリーな情報交換は、訪問看護師にとって意欲向上につながった、などがあげられた。

在宅療養の継続を病院として支援する

国の施策として「在宅医療」が押し進められるなかで、訪問看護の需要がますます高まることは言うまでもない。しかし、在宅療養の継続に利用者の在宅での生活継続は、ご家族の介護力や介護意欲、経済基盤などに影響されやすく、そうした状況に応じた退院支援や生活支援を行なう必要があるだろう。今後は、入院中

の試験外出や外泊においても、退院後の生活を想定し、その生活様式を鑑み、その人に合った方法を患者さんとともに考え、よりいっそう充実していきたい。

また、ニーズに合った支援を必要とすに提供するには、病棟看護、外来看護、そして訪問看護が個別の視点に固執するのではなく、相手の役割を理解しなければならぬ。何を行なう部署が明確にすることは、垣根を越えて必要なときに即相談できる環境づくりににもプラスに働くだろう。互いに何をすべきかを再確認したうえで、適切な支援・ケアを実施するためには、情報の収集と交換が必要となる。情報収集のためらい（収集の速度と共有の遅延）や内容（質）などへの影響もあり、効果的な連携が求められる。

2025年に向けて医療機関の機能分化と在宅医療の推進が強化され、診療報酬改定においても段階的に進められている今日である。急性期・慢性期を問わず「在宅復帰」の意識を求められているが、在院日数短縮だけでなく、患者さんが自宅で生活できるように何をするのか、が私たちに問われているのだと考える。2年後にはさらなる改定が行なわれるが、この間に地域連携がどのように進められたかとも論点となるだろう。そのために看護師各々が、どのように地域と関わっていきけるかを考え、今後も「地域を知る」「在宅を理解する」を課題とした質の高い看護展開ができるよう、スタッフ一丸となって成長していきたい。

佐藤徳子（さとうのりこ）

医療法人社団翠鳳会 翠鳳第一病院
〒656-0122 兵庫県南あわじ市広田広田字畑田 134-1

1341-7045/14/¥500/論文JCOPY
2026/09/29 04:12:33